



寅とらさんの世界と新型コロナウイルス

コロナ禍でテレビ番組は様変わりしています。最近、寅さんの映画が放映されるようになり「フーテンの寅」を見るのが楽しみです。

「トどうせ俺らは やくざな兄貴 分かつちやいるんだ妹よ……」しみじみとした懐かしい歌が聞こえてきます。

新型コロナウイルス感染症と人間社会の戦いは途上です。感染症拡大から4カ月余り、社会は新しい生活様式の実践を呼び掛けています。

「3密を避け、ソーシャルディスタンス（人と人との距離をとる）を心掛け、マスクを着用する」という新生活様式は、寅さんの世界とは常識や価値観が大きく変わりました。

これまで、私たちは痛みや喜びに共感できる親密な人間関係を大切に生活してきました。人とのつながりを大切にしたい寅さんの映画には、私たちが忘れかけている優しさと思いやり、痛みや喜びを共有するほのぼのとした生活の匂

いがあります。

寅さん本命のマドンナは、浅丘ルリ子あさひかさん演じる売れない歌手のリリーです。

寅さんは「金があつたら一流劇場で歌わせたい、割れるような拍手喝采……。気の強いリリーだってきつと泣くよ」と、リリーの成功の夢を語ります。純粋な寅さんの話に、とらやおばちゃんたちが涙ぐむシーンがあります。

「バカダネエ、トラつてやつは：」おじさんのセリフには愛情が染みんでいます。

報われない人、不幸な人への寅さんや妹さくらたちの言動は、私たちに大切な何かを教えてくれているようです。

「たいしたことはしてやれず、できるのは胸を開いて話を聞いて相手に共感することぐらいだ。けれど、それが本来の人の世じゃないか」のセリフは、一層心に染みます。

寅さんとコロナ感染症の時代背景は異なりますが、変わる常識と価値観をチャンスに変えると同時に、変えてはい

けない人としてのありようを考える時です。

夜空の星さえ涼味りょうみを感じさせることなく、寝苦しいまま夜が明けます。

長引くコロナ不況がそうさせるのか、時代が生んだ新たな生活様式がそうさせるのか、身近な欲望しか持たない、いわば「共感を喪失した世代」にはなりたくありません。

世代間の考え方は確かに変わりつつあります。景気回復は大切ですが、人の絆をズタズタに引き裂くような心を失う時代になってほしくはありません。

「それを言っちゃ おしまいよ！」寅さんへの郷愁きょうしゅうが深まるコロナ禍の夜です。苦境を好機に、市民一人ひとりが指宿の豊かな未来の年表を描く時です。



指宿市長
豊留悦男とよどめ えつお